

熊本六街道 豊前街道

もつ一つの参勤交代路 豊前街道

熊本市新町札の辻から鹿子木（北部町）一味取（鹿本郡植木町）湯町（山鹿市）肥猪（玉名郡南関町）を通り、筑後国・筑前国を経由して豊前国小倉へと至る豊前街道。この街道は豊後街道（熊本・大津・内牧・波野・産山・大分鶴崎）とともに、肥後藩の参勤交代ルートであり、薩摩藩のルートでもあった。湯町（山鹿）をはじめ鹿子木や肥猪など数ヶ所に藩主休息所や宿場が置かれ、江戸時代後期には豊後街道よりも頻りに利用されたという。

肥後国領を出ると久留米から日田往還が分岐し、江戸時代唯一の海外門戸である長崎への道と田代（佐賀県）で交叉するなど、九州全体からみても重要路線の一つであった。

在の町役場の敷地、御茶屋跡は相当痛んでいるが、九曜の紋の屋根瓦や庭の心字池に名残りを留めている。またこの町は、肥後北辺の守りの要であり、筑後との国境には通称「松風の関」という関所が置かれ「関所やぶりは死罪」というほど厳しい取り締りが行われていた。南関の地名は、この背戸坂の関を境にこの辺りを「関の北、関の南」と呼んだことに由来する。左右に山が連なり甚だ峻険な難所であったこの関所跡には今でも多くの地蔵が祀られている。

人や地域と道、そして史跡との関わりを各街道を実際に歩く中で探訪してきた「熊本六街道」シリーズも、今回の豊前街道で最後となった。

車社会が発達する中で、旧道の姿をとどめるものは激減しつつあるが、近代的な道路の傍らや家並に融和して、今なお人々に安らぎと利便を供し、また大切にされつつ人々の生活に深く根ざしているものに数多く出会った。そしてそれは、郷土くまもとの今日の発展を築いてきた歴史の重みを伝えてくれている。

（参考文献）熊本県歴史の道調査 豊前街道
昭和58年3月 熊本県教育委員会発行
お問い合わせ
熊本県教育庁文化課
TEL(096)531-2111

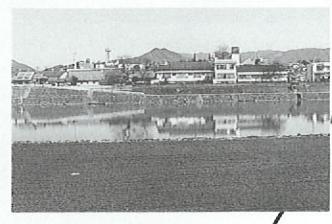
豊前街道
J/R
現在の国道・県道



⑩温泉プラザ入口



⑨山鹿の総門跡
山鹿町中への入り口跡で、大門があった。参勤交代の際にはここからお茶屋まで、白砂を敷いて諸侯を出迎えたという。



⑧菊池川河港跡
川岸の土手上から水際まで、俵を船積みするための傾斜をつけた石畳（俵ころがし）が設けられていたという。



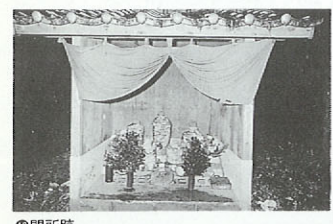
⑨湯分石（山鹿）



⑩八千代座前の通り



⑩光行寺
当時はお茶屋として利用されていたという。家の中には一部普の関取りが残っており、藩主が座る御居間は従臣が座る部屋より一段敷居が高くなっている。



⑩関所跡

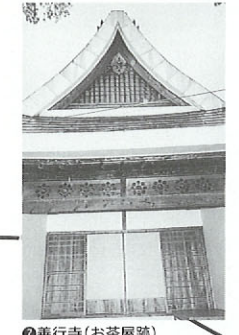


⑩御茶屋跡（南関）



⑩境界石

福岡県



⑦善行寺（お茶屋跡）



⑥御馬下の角小屋
細川・島津氏などが利用したお茶屋跡。庄屋堀内家の住宅であり、質屋・酒屋をも営んでいた屋敷は多くもほほ昔のままの姿を留めている。現在、歴史資料館として整備され参勤交代や当時の商家の様子を伝える資料が展示されている。



⑩郡境の碑



⑩長野原はぜ並木



⑨切通しの道
加藤清正が軍事的配慮から作らせた四道。徳王（TKU周辺）から植木までの間、台地を二回（一八〇センチメートル）ほど掘り下げた所を道が通っている。戦の際、左右の崖上から下を通る敵を攻撃するために、また、自軍の動きを敵の目から遮断するために構築された。



⑩山伏塚
熊本城築城の際、地鎮祈禱のため上方から招かれていた山伏・龍蔵院が滞京することになり、帰途ここで送別の宴が開かれた。龍蔵院は兎送りの武士に問われるがまま城の構えを詳細に語ったので、機密が他国に洩れることを恐れた武士達に打たれ、ここに葬られたという。



⑩新堀橋



⑩出町



⑩城内を通る街道
熊本城は、城内を他藩が通過する全国的にも珍しい城である。無防備にも思えるが、ある時島津藩が城内の街道（二の丸あたり）を通過中、「細川殿も不用心なこと、他国の群勢に城内を通過させるなど」と声高に話したところ、周りを囲む板垣の向こうから「何と、今城門を閉めれば島津公は袋の鼠ぞ」とやり返されたという。

出湯の町ー山鹿
熊本市内から、街道はほぼ国道三号線に沿って北上、味取で国道から全く離れて鹿央町を通り、山鹿市へと入る。平安時代から「湯の郷」として名高い山鹿は、参勤交代路最初の宿泊地。「湯町」と称され、「山鹿千軒たらいなし」といわれるほど出湯の宿場町として発展していた。江戸時代には藩主専用の「御前湯」があったというが、市内中心部の開発で姿を消し、今では温泉プラザの浴場入口の屋根の九曜紋（細川家の紋）が、往時の姿を伝えるのみである。

また山鹿は菊池川の河港を持つ水陸交通の要衝でもあった。城北地区の年貢米をはじめとする多くの物資がここに集まり、二千艘あまりの船が往来し、賑わったという。

湯の町・物資の集散地として発達してきた山鹿は、現在も県北部の拠点都市の一つとして発展しながら、八千代座前の通りの街並みに昔の面影をうかがわせる。

筑後との境ー南関
山鹿を出て西へ。平野（三加和町）、肥猪を過ぎて関町（南関町）へとたどり着く。途中の道筋は「車返し」や「腹切坂」などの急坂と平坦地とが交互にあらわれる、起伏に富んだ道のりである。

南関町は、旅人を宿泊させたり、荷物の運搬に必要な馬や人足を手配したりする宿駅が置かれていたため、交通の要所として栄えた。町中には多くの商家が並んでいたという。宿駅跡は現

参勤交代豆知識
六回のシリーズの中で度々登場した参勤交代。江戸時代各藩の大名は、一年毎に（一八六二年から三年毎になる）江戸と所領を往来し、一定期間主君の統治下で幕府の政務に携わらなければならなかった。従者の人数は藩の石高によって異なったが、五十四万石の肥後藩の場合供侍の従者も含め千人余りの数にのぼったという。

費用も莫大なるものであり、当時かかった金額を現代のお金に換算すると、一回につき約一億一千万円も必要だった。例えばお茶屋等で休息するたび、茶代銭二千文（約半両）ほどが支払われ、約四里毎に休息をしたというから、江戸との往復は確かに相当な金額を要したであろう。街道周辺の村人達も交代の度に様々な労役に駆り出され、庄屋達は芋などの特産物を土産に献上したりしていたが、参勤交代による利益は少なかったようである。